

留学便り (2021年11月7日付)

ご無沙汰しております、フロリダ州タンパ市より高橋秀徳です。昨年11月の渡米から早一年が過ぎてしまいました。家族もコロナ禍の中、2021年5月に無事渡米することができ、おかげさまで皆元気に過ごしています。今回は、8月から始まった子供達の学校生活について少し報告させて頂きたいと思えます。

5月末からの長い夏休みが終わり、8月半ばから子供たちの初めてのアメリカの学校生活がついに始まりました。こちらは8月が新学年のスタートで、日本とは時期が異なります。米国留学経験者のブログなどを読むと、語学力の観点から一つ下の学年を選択していることが多いようでしたので、直前まで子供達の学年選択について家族でかなり悩んでいました。が、最終的にはフロリダ教育委員会(海外から来た学生の学年割り振り専門部門が存在しているそうです)からの一本の電話でサクッと決まりました。

実はフロリダ州の規定では、「親に学年選択の余地はありません」とのことでした(州ごとに違うみたいです)。長女の場合、2021年3月末に中学1年を修了している所以この8月からは新中学2年生、次女は同じく小4修了生なので新小5、三女は幼稚園出ているから小1、ってことでした(事前の英語力チェックは一切なし)。そのぶん恐ろしいことに学年ごとに進級試験があって、小学生でも留年することは決して珍しくないそうです(特に、昨年はCovid下でオンライン授業が主流だったことから、学力修得が不十分なケースが全米で問題になっているとのことでした。うちの子達、大丈夫かな～)。

アメリカにおける義務教育は、“K-G12”と呼ばれる「日本の幼稚園の年長から始まり高等学校を卒業するまでの13年間の教育期間」を指し、高校生活も義務教育に含まれています(すなわち、公立学校は高校まで学費は無料)。最初の“K”は幼稚園(Kindergarten)の意味で、小学校からはGをつけて小1が“G1”、小2が“G2”、フロリダ州では小5(=G5)までの5年間は小学校(Elementary School: 州によって小中高の学年の区切りは異なる)で過ごし、G6(日本の小6)～G8(中2)の3年間は中学校(Middle School)、G9(中3)～G12(高3)までの4年間は高校(High School)となるそうです。

それにしてもアメリカ社会では学生がとても大事に扱われていると感じます。学費無料に加え(その代わり、頻繁に寄付を募るイベントや手紙は学校から届きます)、交通機関も無料(写真は通学専用のスクールバス。路線バスのように街中をカバーしています。その代わり、学校毎の運用ではないので途中で乗換えが必要)、早めに学校に到着する生徒には朝食が無料で提供され、さらに昼食も無料です(ただし、週3回はピザ!)。登下校の通学路には警察官が立っていて、子どもたちへの朗らかな声掛け(「Have a nice day!」「Happy Monday!」)とともに横断歩道での安全確保をしてくれます。



写真:スクールバス(全米で全車両が黄色に統一され、よく目立ちます)

うちの子供達の学校はいずれも近いので、バス利用していませんが、このアメリカのスクールバスの仕組みは実に素晴らしいと感じます。生徒が乗り降りする際には、バスの側面にある“STOP”の赤看板が横に突き出てきます(写真)。この STOP サインが出ているときは、すべての車はバスの後ろで止まって待つ必要がある(追い越したら重大な交通違反！)ので、広い4車線でも一斉にすべての車が止まる光景はなかなか壮観です。「子供たちは社会で最も大切にされるべき存在である」という教えがまさに具現化されているようで、日本もこうあってほしいと思いました。ちなみに、ここフロリダでは横断歩道に人がいれば、ほとんどの車が止まって歩行者を優先してくれます。

ここタンパは、スペイン語を母国語とするヒスパニック系の人々やインド人が多い地域で、英語を第2言語とする生徒向けの語学授業(ESL=English Second Language)が通常授業の時間帯の中に組み込まれています。とはいえ、その他のネイティブ英語の授業についていくのはやはり大変で、中でも国語に相当する科目 ELA(=English Language Artと呼ばれています)や社会(=Civics)は日本人にはあまり馴染みのない内容や難しい単語が頻出します。小5の娘の ELA では、とあるネイティブ・アメリカンが第2次世界大戦中に米軍の暗号を用いた通信部門として活躍することになった時代背景を考えさせる課題(ここ、普通の公立学校です。。。)。中2の娘が持ってきた宿題では、アメリカ独立宣言のベースになった哲学者や、独立宣言に記載された内容(国民や州が政府に対して持つ権利)についての話題が取り上げられていました。なぜ州ごとに学年の区切りが違ったり、交通ルールも異なる、最近ではマスク着用に関して州知事が政府と対等にやり合う、などなど、州の権利がどうしてこんなに強いのか少し理解できた気がします(まさに合“州”国だったのですね)。“立派なアメリカ人”として社会に出るために必要とされる知識の習得を目的とした話題が随所に盛り込まれていて、日本の教育内容や意図の違いを感じます。

先日は次女の小学校で、家計について学ぶための興味深い課外実習がありました。専用の施設の中で各自 iPad を持ち、大人になった仮想の自分が希望する職業について人生を送っていく中で、さまざまな人生イベントが与えられていく中で経済の仕組みをゲーム感覚で学ぶ、というものです。高い家や車を買ってしまったり外食頻度が多すぎて借金生活に陥り、インストラクターからダメ出しされている子がいたり、貯金は収入の何%するかを考えさせたり、ボランティアとして参加した家内も一緒に楽しく勉強したようです。こうやって小学生の時期からお金の使い方や経済について学ぶ機会が義務教育として与えられていることが、アメリカ経済の強さやベンチャービジネスが次々と生まれていきっかけ作りになっているのかもしれないなーと勝手に納得してしまいました。他にも、web 上でアクセスできるデジタル図書館の存在(日本以上に、家庭での読書の重要性が謳われているように感じます)や、自宅学習プログラム(定期的な学習到達度テストはオンラインで実施されています)など、コロナ禍の影響で整備された公立学校の教育体制の充実ぶりにも驚かされます。

一方で、毎週日曜日の夕方に校長先生から届く親向けのメールには「学校には銃やナイフ、麻薬などは持ってこないこと」「朝食は無料で提供されているので、朝マックは持ってこないこと」など、本気かどうか判別不能の注意書きが添えられています。これもきっと、アメリカあるある、なのでしょうね。